〔書評〕

〈幻想〉と〈実証〉と

――安森敏隆著『斎藤茂吉短歌研究』――

平岡敏夫

索引も入れて五〇〇頁になんなんとするこの大著を読み終えて、二十年という歳月をつくづく思った。研究ということ、人間ということ、時代ということもあろう。二十年というのは、著者安森敏隆氏がちょうど二十年前に、『斎藤茂吉幻想論』（昭和五三・三）を刊行し、本書『斎藤茂吉短歌研究』（平成一〇・三）がそれにつぐ茂吉に関する第二冊目の単著であるからだが、安森氏の茂吉研究に関心ないし愛着を持つ人は、二十年の歳月を隔てた両書を比較してみたいという自然な欲求を覚えることだろう。小文はそれを試みるだけのスペースを与えられていないので、たんなる印象を記すにとどめるしかないが、頁数という外見からしても約三〇〇頁の前著に比して格段の大著となっている。

前著は序説・幻想論、第一章・自然論、第二章・思想論、第三章・言語論、の三章構成に序説がつけられ、後者は序説はないが、第一編・短歌論、第二編・歌集論、第三編・歌人論、第四編・読者論の四編構成であり、それぞれ一〇章・一〇章・一二章・三章の全二五章となっている。両者の目次上のもっとも大きな相違は「幻想」論にあり、新著第四編読者論の第三章茂吉短歌享受史によれば、安森『斎藤茂吉幻想論』は「従来の実証主義的研究によってあきらかになった茂吉像に〈幻想〉の視点を導入することによって新しい茂吉像の創出を企図したもの」となっている。「幻想」については本書でもよく参看される塚本邦雄氏に関して、『幻想』の視点をおき、一首の歌の修辞や意味の彼方にある表出や、時間をこえた古典や時代の読みをとおして茂吉にせまろうとしている」と安森氏は言い、その「幻想」の本質は「自然主義リアリズムのアンチテーゼとしてではさらさらなく、幻想は人間の、詩人の使命であり、本能であり、特権であること」（「短歌考幻学」）というところまで普遍化され、時代と状況を「幻想」という遠視法でもって射つところまで先鋭化されたもの、と述べている。

この享受史は「今後の研究は、従来の実証主義的な研究によってあきらかになった日常的な茂吉像をさらに止揚させて、想像的な自我をも加味させた茂吉像の創出にあたり、根本的に近代短歌の巨匠である斎藤茂吉を問いなおす段階にきていることがわか

る」と結ばれており、これが本書全体の結びでもある。前掲引用文と比較すれば明らかなように、〈幻想〉の視点を導入すること云々とあったものが、止揚、想像的自我をも加味させた云々の表現になっている。つまり〈幻想〉の語が消えているのである。これは一例に過ぎないが、本書全体の印象として、〈幻想〉ばなれ、というか、〈幻想〉をこえて、というべきか、つくづく二十年の歳月を思ったというのはこの点にかかっている。

著者がかつての〈幻想〉論の立場を放棄することなどはありえず、前掲引用の塚本〈幻想〉論によってしても、それをなおざりにすることなどはありえないが、二十年後のこの新著は前著に比して、きわめて着実であり、記述的であり、実証的であり、飛躍や幻想といったものがほとんどみられないということがある。

第一編短歌論のはじめ三章は『赤光』を論じたものだが、初版『赤光』（大正二・一〇）と改選『赤光』（同一〇・一一）とを比較するに、改選の方の跋や「手帳」等により茂吉が改選する事情を記述し、表によって両者の目次比較を行い、削除歌を一連の歌のなかでゴシックで示しつつ、削除理由について、それぞれ納得のゆく説明を示している。一八頁にわたって本文の引用と指摘がつづくのだが、一見、平凡・退屈にみえながら、この記実的ともいえる方法が読む者をひきつけるのは、著書の指摘が的を射ておもしろいからである。結びで七六首の削除歌の特徴を六つに分類しているが、このような作業による諸特徴の指摘は動かないと思う。ただ、ここにはそれについての価値判断は記されていない。たとえば特徴のⅠは「空想的、抽象的、観念的な主観の歌の削除」であるが、その削除が改選『赤光』評価にどういう意味を持つのか、前著にいう〈幻想〉の視点とは直接重ならないとしても、Ⅱの「ロマンの歌」、Ⅲの「エキゾチズムの歌」の削除等の意味とともに、著者の判断（ひいては初版の評価）が聞きたいのである。著者にとっては自明のことかも知れないが、上のような傾向を、私は実証的、記実的と言ったのである。

第二章の『赤光』の死生観、第三章の『赤光』の女性像も興味深く、たとえば〈おひろ〉の連作に「あるべかりし〈女〉」を求めてゆく手順、そこから「『赤光』という歌集は茂吉が『写生』論で唱えた具象的志向とはほどとおい、まことに『幻想』的志向よりなった歌集であることがわかるのである」と結論している。それがどうなのか、と私は聞きたいわけなのだ。第四章の『あらたま』の編纂意識の検討も綿密なものだが、「第二歌集『あらたま』は、その編纂において、半分近くを徹底的に構成しなおすという再編纂を強行した意図的な歌集」であり、この編纂にひきつづいて「初版『赤光』中の空想的、想像的な歌が七十余首削除されて」、「大正九年の『写生』説の確立期に『あらたま』さらには改選『赤光』が編纂されたということは、いかに強調しても強調しすぎることはない」とする。むろんこの結論自体には疑問の余地はない。

おもしろいのは第五章の歌集『遠遊』のなかの「同胞」探索で

ある。

ポンペイに同胞ひとり死せること知りてより琅玕洞をおもひ止まり居る

この「同胞」ひとりについて塚本邦雄氏から照会を受けた著者安森氏は、書簡や歌、手帳等から五三人の日本人をリストアップし、ベルリンで客死した若い医博赤松信麿（与謝野鉄幹の実兄の次男）までたどりつくが、ポンペイでなくベルリンで、しかも五ヶ月も前に病没とあって頓挫、さらに「ナポリ遊行記」と「ナポリ」詠とを綿密に呼応させてゆくなかで、日本から来た二人の旅客のうち一人が自動車事故で死んだという話につきあたり、琅玕洞を思い止まった理由は旅の疲れからであって、「同胞ひとり死せること知りてより」の「より」の理由によってではなかったことがわかる。「茂吉における短歌の『写生』とは、まことに『に』によって代表される場所あるいは日時においてほとんど〈うそ〉は言わないが、『より』によって代表される理由および結果においては〈事実〉をはるかにつきぬけた仮構の〈幻想〉を形象化している場合が往々にしてあることを知っておかねばならない」と結論するが、著者安森氏はここでも長年の本領を発揮していると言ってよい。

第六章の滞欧随筆と「碧眼明色の娘」では、ウィーン留学中、ゲソイゼ谿谷を「維也納うまれの碧眼明色の娘」と二人で旅をしたことが随筆では生き生きと描かれているのに歌には出ないことに着目しつつ、滞欧中の茂吉の〈少女〉を探索、「娘と大雪の積もってゐる谿へ行って旅寝をしたことなどは一言も云はなかった」とあることから、「打消」をもって逆にこの「娘」の存在の「事実」を事実として読者にヴィヴィッドにきざみこませるという茂吉の「打消」の写生――または「演技」としての写生――を指摘し、「碧眼明色の娘」がみごとに虚構の真実としてうまれたのではないか、と言っている。安森氏のこの指摘の見事さにはまさに舌を捲くしかない。

第七章『寒雲』の「布野」詠でも、塚本邦雄氏が次の歌の「ふたつの墓」のうち、中村憲吉のでないもうひとつの墓は、と著者に質問したことに対して探索を行っている。

出雲路をとほり来りて山青きふたつの墓に今ぞぬかづく

三次中学（三次高校）の先輩中村憲吉の墓に行ったことを思い出しても無理で、憲吉関係の文献を調べても同様、そこで茂吉日記へ。日記はこの間は書かれていず、書簡に「憲吉君孝君のお墓」とあっても「孝君」がわからない。結局、旧姓入沢孝、「アララギ」会員、憲吉の長女良子と結婚云々と日記で判明する。「ふたつの墓」の実証はこれでめでたしだが、まだこの先があるのが著者安森氏の面目を示すもので、実は手帳では祖母も入れて「三つの墓」だった。一つを切り捨てることによって「ポエティカル・マティリアル」をすくい出すという方法」を安森氏は指摘している。まだその先の「第四の墓」の問題もつづくのだが本書によって見られたい。私は三次高校で憲吉のみならず倉田百三碑も見た

記憶があるが、安森氏にはこれら先輩の何かが流れこんでいるのかも知れない。

第八章「昭和十年代のアンソロジー」では、戦中の『新万葉集』、『支那事変集・戦地篇』、同銃後篇、『愛国百人一首』、『万葉秀歌』、『作歌四十年』等への言及があるが、歌は一首も引かれていないのが残念だ。第九章『小園』と八月十五日、では五頁、あるいは七頁近くもベタに歌が引かれているのである。二十年前の著者ならこれだけの本文をベタに引用することには耐えられなかっただろう。戦中の問題は、第九章『霜』『小園』『白き山』の位相のところへもつづくが、ここで私は評者としてもっとも言いたいことを述べねばならない。戦中に編んで未刊歌集となっている「いきほひ」（昭和一六）「とどろき」（昭和一七）「くろがね」（昭和一八）、とくに生前最後の歌集『霜』（昭和二六）論及のためには前二者を公にすべきという私の指摘（平成五・一「国文学」没後四十年茂吉特集）を引きつつ、著者はそれらが出ることによって第十四歌集『霜』との総体が確認され、さらに「とどろき」「歌集稿本」が出ることで第十五歌集『小園』との総体が確認され、「歌の移動関係や連作の並べ方も確認されることになる」と述べている。

たんに移動関係や連作の並べ方の問題ではなく、「茂吉がしばしば連作という形をとる以上、『霜』の歌は省かれた歌（あるいはその連作）と並んでいたのであり、一方を省いた残りだけで味わい、研究の対象とするというのは、不自然というだけでなく、戦中の茂吉についてのまともな仕事ともなりえないのではないか」と私は書いている。時勢向きの歌と一見そうでない歌の「一方のみを揚げて一方をけなすやうな論者なら、それは間抜けものに過ぎまい」という戦中の茂吉自身の言葉もつけ加えているが、著者の言う総体の確認のためにこそ、このあたりまで価値判断に踏み込んでほしいのである。なお、この茂吉特集では、小文の次に安森氏の「『小園』『白き山』『つきかげ』」が掲載されているが、これは丹念な補筆を受けて、第二編第九・十章に生かされている。

第一編に多くを費やしてしまったが、それほどに大きな成果をあげている。第二編歌集論は全十章が新稿で、三つの〈私〉として1歌人茂吉、2作品茂吉、3編纂者茂吉を設定、この三つを適用して各歌集の位相を検討するという意欲にみち、整然、明晰である。パターン化の印象は拭えないが、編纂者茂吉の設定などこの問題は今後不可避であろう。

上ノ山の町朝くれば銃に打たれし白き兎はつるされてあり
弟と相むかひゐてものを言ふ互みのこゑは父母のこゑ

『白桃』（第八章）で「白き兎」や「父母のこゑ」に言及する著者の心は読む者に迫り、妻の「ダンスホール事件」以後の茂吉の「精神的負傷」への言及も強い印象を残すものとなっている。

第三編歌人論は与謝野晶子および鷗外に茂吉が言及した二章から成るが、晶子の歌に茂吉のコメントがないのが多いという指摘はおもしろい。鷗外『うた日記』への言及もあるが、私としては

『うた日記』中の「罌粟、人糞」などの詩を茂吉がどう思ったかなど考えると興は尽きない。第四編読者論では、第一章で「作品」ではなく「テクスト」論としてとらえ直すという主張を本林勝夫『茂吉遠望』で説き、第二章で「読みの可能性」を北杜夫・塚本邦雄・本林勝夫の茂吉へのアプローチで語り、第三章の享受史へとつないでいる。

この小文冒頭に記した私の感懐はまだまだ語り尽くせるものではなく、著者安森氏の〈幻想〉風な筆跡は変わらないなあ、などとも思いつつ、その二十年という歳月を自分自身の上にも重ねてみたりするが、ともあれ、こうした感懐は、言うまでもなく、この労作『斎藤茂吉短歌研究』が課したものにほかならないのである。

（世界思想社刊　一九九八年三月　本文四六〇頁・索引二二頁　一〇〇〇〇円）

（ひらおか・としお　筑波大学名誉教授）